氏　　名　森岡範之（もりおかのりゆき）

学位の種類　博士（歯学）

学位授与番号　岩医大歯博第110号

学位授与の日付　平成20年6月30日

学位論文題目　心理テストを用いた顎関節症発症に関する5年間の前向きコホート研究

論文内容の要旨

Ⅰ　研究目的

顎関節症は様々な病態を呈する多因子性の疾患であり，その原因や寄与因子の解明に多くの研究がなされてきた。なかでも顎関節症と心身医学的特性の関係について各種心理テストによる調査が行われている。しかし，その多くは症状発症後の心理状態を調査した横断研究である。また，縦断研究でも健常者を追跡したものは少ない。本研究では健常者をコホートとして2.5年ごとの経過を5年間追跡した前向きコホート調査を行い顎関節症発症とその寄与因子と考えられる心身医学的特性の関係について検討した。

Ⅱ　研究方法

調査対象は，1996年から2000年の間に入学した岩手医科大学歯学部学生で顎関節症状ならびに既往のない本研究の趣旨に同意の得られた207名（男性139名，女性68名，平均年齢20.4 ± 2.2歳）である。

調査方法は初年度に質問票による顎関節症状に関する調査と4種類の心理テスト（Y-G, CMI, SDS, MAS）による心理特性の調査を行った。中間時点の2.5年経過時に質問票による顎関節症状の調査を行い，5年経過後に再び質問票と4種類の心理テストによる調査を行った。得られたデータをコンピュータ上で処理し，顎関節症発症のリスクを表すオッズ比を求めた。また，交絡因子による影響を排除するためにロジスティック回帰分析を用いて調整したオッズ比（OR）を求めた。統計学的有意性は95％信頼区間（95%CI）から判定した。カテゴリカルデータの分析にはχ二乗検定を用いた。統計処理には統計解析ソフト：SPSSver. 14. 0J（SPSS株式会社，東京）を用いた。

Ⅲ　研究成績

調査対象の207名のうち，5年間の追跡が可能であった129名中，無症状群は97名，症状発症群は32名であった。また，2.5年後と5年後で顎関節症状の疼痛と開口制限および混合型の有病率，性差には有意差は見られなかった。しかし，関節雑音は5年間での顎関節症発症に関する有意なリスク因子となった。

心理特性が顎関節症に与える影響をみるため，，初年度の心理特性と5年後の顎関節症発症の有無から求められたオッズ比はY-Gで2.65(95%CI = 1.07-6.56）と有意な値を示した。また，心理特性相互の影響を調べるために交絡因子と考えられる性別と顎関節雑音を強制投入したロジスティック回帰分析で求められた調整オッズ比は，Y-G : OR = 7.00(95%CI = 1.45-33.79）と関節雑音 : OR = 8.39(95%CI = 2.70-26.11）の2項目で有意になった。

初年度と5年後の心理状態を4パターンに分類し，心理状態が顎関節症発症時期に影響するオッズ比を求めたところ，初年度も5年後も情緒不安定傾向のみられた群のオッズ比が5.33(95%CI = 1.37-20.73）と有意となり，性別と雑音をモデルにとり込んだ調整オッズ比は6.86(95%CI = 1.62-29.14）であった。

Ⅳ　考察及び結論

今回の研究結果から，心理要因が顎関節症発症に関与することが示された。

一方で，調査対象者が普遍性のある集団とはいえない点，心理特性と顎関節雑音以外の要因も複雑に関与している点を考慮する必要がある。今後，より多くの因子を含んだ多変量解析を行うことにより，因子間の作用を紐解き，

顎関節症の病因論を整理することができるものと考える。

1．前向きコホート研究の結果，情緒不安定傾向が5年間での顎関節症発症のリスクを高めることが明らかとなった。

2．情緒不安定傾向は顎関節症の発症前からみられ，発症後も同様に情緒不安定傾向を示すことがわかった。

論文審査の結果の要旨

論文審査担当者

主査　教授　石　橋　寛　二（歯科補綴学第二講座）
副査　教授　米　満　正　美（予防歯科学講座）
副査　教授　鈴　木　哲　也（歯科補綴学第一講座）

顎関節症発症には多くの因子が関与しており，その発症機序や関連因子の全てはいまだに明らかにされていない。これまでの前向きコホート研究によって示された寄与因子は質問表や臨床所見から判断されたものであり，心理テストを用いて行われた詳細な報告は少ない。

本研究では，顎関節症発症の予測因子として4種類の心理テストを用いて検討している。症状のない時期における顎関節症発症のリスク判定にこれらの心理テストを用いる意義は大きい。今回の結果から，情緒不安定傾向を示す場合に顎関節症発症のリスクが高くなるという貴重なデータが得られた。

本研究の意義は，顎機能障害発症の好発年齢層である20歳代を対象に心理テストを用いた前向き調査を行うことにより，情緒不安定傾向を有する心理特性が顎関節症発症の寄与因子であることを明らかにしたことにある。これらのことから，顎関節症の発症を予測する手段の一つに心理テストが有用であることが考えられた。また，今まで明らかとなっていなかった顎関節症発症の病因解明の一助となることが期待される研究である。

本研究で得られた結果は学位論文に値すると評価した。

試験・試問の結果の要旨

本論文の臨床における意義，心理テスト，顎関節症の寄与因子ならびに顎関節症の発症に関する基礎的な事項を試問した結果，適切な解答が得られた。外国語に関しても十分な能力を有することが認められた。また，今後の研究にも意欲を示すとともに後輩への指導能力も備えていることから合格と判定した。